

## 審査講評 2013 日本ストックホルム青少年水大賞 審査部会長 千賀裕太郎

### 賞の概要と応募状況：

「日本ストックホルム青少年水大賞」は、20歳以下の高校・高等専門学校生徒または生徒の団体による水環境に関する調査研究活動および調査研究にもとづいた実践的活動を表彰するもので、その受賞者は毎年夏にストックホルムで開催される国際コンテスト「ストックホルム青少年水大賞 (SJWP)」に日本代表として参加することになります。

昨年の日本代表である青森県立名久井農業高等学校 TEAM FLORA PHOTONICSは、「大震災を乗り越えて～海岸のシンボル『サクラソウ』の保護と塩害花壇の再生活動～」と題して27ヶ国からの代表に混じって堂々と研究成果を発表し、審査員の強い関心を引きましたが、惜しくも受賞を逃しました。

本年は全国より15校、17団体（北海道1団体、東北3団体、関東5団体、中部2団体、近畿3団体、中国3団体）から応募がありました。いずれも身近な水環境を対象にした力作ぞろいの高校生らしい自主研究でした。

### 審査経緯

審査は、5人の審査委員からなる審査部会において、ストックホルム青少年水大賞世界大会の審査基準に従って、厳正に行われました。この審査基準は、妥当性（水環境がかかえる重要な問題に的確に取り組んでいるか）、創造性（問題提起や問題解決の方法、実験・調査やデータ解析の方法に創造性がみられるか）、方法論（明確な問題意識のもと作業計画が適切であるか）、テーマに関する知識（既往研究のレビュー、参考文献、情報源、用語の理解等が十分か）の4項目からなります。

審査は2段階で行われました。まず審査委員がそれぞれ行った書面審査の結果を持ちよって審議して、上位4チームを選びました。次にこの4チームから、英語による要旨発表及びパワーポイントを用いたプレゼンテーションを聴取したうえで質疑を行い、慎重な協議を経て「日本ストックホルム青少年水大賞」及び「審査部会特別賞」の授賞団体をそれぞれ選定いたしました。

### 審査結果と授賞理由

「2013年日本ストックホルム青少年水大賞」に輝いたのは、「瀬戸内海の海底ごみ問題の解決に向けての取り組み～回収活動と啓発活動からのアプローチ～」と題する調査研究を行った、山陽女子高等学校地歴部（代表：山口結愛、井上歩美、築地志歩、指導教諭：井上貴司）です。

海底環境に深刻な影響を及ぼす海底ゴミは、目視できないこともあって、その認知度は一般に高くありません。本研究グループは、本問題で漁獲量の減少という直接的被害を受けている漁業協同組合の協力を得て、瀬戸内海において5ヵ年にわたり漁船を用いた海底ごみの回収活動をおこなって海底環境の浄化に貢献するとともに、その実態解明に向けた調査研究を行いました。この結果、瀬戸内海という閉鎖性の海域では、陸地から河川等を通じたゴミの流入が多く、ビニール、プラスチック、アルミ缶、ペットボトル、スチール缶等の生活ゴミが大部分を占めていることを明らかにしました。さらにこの調査研究結果を、メディアや学術集会、国際会議等で報告するなど、啓発活動を積極的に行い、海底ごみ問題への市民の認知度を著しく向上させるなど、本問題の解決に重要な貢献を行っています。以上の理由から、本研究グループに日本ストックホルム青少年水大賞を授与することとしました。

また、審査部会特別賞に輝いたのは、「日本一暑い町・多治見を冷やす2つの機構 川と山」と題する調査研究を行った、岐阜県立多治見北高等学校自然科学部（代表：土井淳平、塚本悠喜、柴田大輝、指導教諭：田中誠二）です。

近年、日本での観測史上最高気温を記録している“酷暑のまち”多治見市において、地形及び土地利用と気象との関係性を解明する調査研究を行った結果、盆地外縁部の緑地と市内を横断する河川が、都市を冷却

する機能を有している可能性が示唆されました。本調査研究は、局地気象研究に貢献するとともに、地域計画手法における森林及び河川・水路の機能・意味論に新たな知見を提供する可能性が認められることなどから、更なる調査研究の発展への期待を込めて、審査部会特別賞を授与することとしました。

---